

『どう生き どう死ぬか—現場から考える死生学』

このたび、「タナトロジー研究会」のメンバーを編者・執筆者とした、死生学の本が刊行されました。編著者には当法人のスタッフも入っております。医療・介護の現場に関わるスタッフの経験と人文・社会科学の分野での死生に関する知見とが融合した、臨床死生学の試みです。以下、ご紹介させていただきます。

本書は患者の生と死に触れて、医師、ナース、その他の医療従事者のリアルな印象を述べたあと、それを受けて生命倫理や哲学、社会学、宗教学の研究者が、死にゆくものの遺したメッセージをどう受け止めるべきかの説を紹介し、“いのちと死の真の姿”を描いた感動的な本だと思う。(日野原重明)

〈内容紹介〉

死を意識しない毎日の中で突然、自身や身近な人の死が迫ったとき、その動揺ははかりしれない。

かつて日本人の多くは自宅で死を迎え、死にゆく人、看取る人、ともに死を受けとめる文化を持っていた。在宅ホスピスという死の現場を共有する医療者・研究者である執筆者たちは、この失われた文化を探りつつ、死から逃げず、死と正面から向きあいながら生きていくとはどういうことかをさまざまな分野から解説する。

〈目次〉

- 序 どう生き、どう死ぬのか
- 1部 生と死の現場から
 - 1章 在宅ホスピスの現場から
 - 2章 看取りを支える、生を支える
 - 3章 最期の選択
 - 4章 教育現場における生と死
- 2部 生と死の探究
 - 5章 死すべきものとして生きる
 - 6章 死すべきものの仕事
 - 7章 遺された言葉
- 3部 生と死の語り
 - 8章 “あの世”はどこへ行ったか
 - 9章 日本人の死生と自然
 - 10章 死別の悲しみとそのかなた
 - 11章 受け継がれていく生
 - 終章 人生の終わりをどう生きるか

監修：清水哲郎

編者：岡部 健／竹之内裕文

出版社：弓箭書院

定価：2000円＋税

発行日：2009年5月20日

